

# 自己の足跡を辿つて

一年譜の形で

箭内健次

明治四十三年（一九一〇）

一月十六日小石川区指ヶ谷町一三七番地（現文京区白山二丁目）において瓦・千穎の第三子として誕生。時に父は三十五才、母は二十五才。長兄慎一は三十八年誕生後三ヶ月で夭折。姉雅子は四十年三月生。健次の名は郷土出身の著名な学者山川健次郎から採つたという。なお長弟章は大正七年生。末弟元は大正十一年生れとかなり年令に隔りがあつたので両親は自分を唯一人の男子と考えて養育したらしい。

大正二年（一九一三）

小石川区林町六十六番地（現文京区千石二丁目三十三番地）に転居、以後大正十四年まで居住。近くには宮内大臣一木喜徳郎、三菱の大番頭莊田平五郎、木綿問屋前川家があり、植物園にも近い高台にあり、谷を隔てて高等師範学校が眺められる静かな住宅地であつた。

大正五年（一九一六）

東京市立明化尋常小学校に入学。近くに林町小学校があつたが特殊教育を行うとかの理由で敢て一キロほど東の同校に入学した。本校は小石川区内では礒川小学校と共に最も古く、たしか卒業の時は第四十数期位であつたかと思う。従つて

校舎も木造のかなり老朽した建物で、階段を上下する毎に音を立てるので「音楽学校」などといつてた。六年間のうち、四年間は遠藤松蔵先生が担任であつた。豊島師範を出たばかりの若い且厳しい先生で図画・手工が得意であり、性來無器用の自分は殆んどいつも「乙」の評価がつけられていた。先生は「歴史」と「唱歌」は苦手だつたらしく、屢々「代講」させられた。オルガンで片手で脚ふみで唱歌の練習をしたことが印象に残つてゐる。自分たちは小学唱歌を歌つていたが、階下の教室では屢々洋楽（今にして言えばシユーマンの「楽しい農夫」などであつたが）の歌が聞え、異常な感激を覚えたものであつた。

### 大正十一年（一九二二）

明化小学校卒業、都立第六中学入学、小学校同窓中、中学校に入学したものは三十数名中僅かに十名足らず、あとは若干高等小学校に進学したにすぎず。

中学は始め近くの駕籠町に二年前新設したばかりの府立第五中学校（現小石川高校の前身）に入学する考であつたが、場所が以前精神病院（現松沢病院の前身）であるとの故と、新設の府立六中の校長の阿部宗孝先生が父の友人の故で遠方だが受験、幸い合格尚同校は校舎未完成のため一年間、牛込区加賀町（現新宿区市ヶ谷加賀町）にあつた府立四中（現在戸山高校）の一隅に仮住いを余儀なくされる。新入生二百七十余名、明治神宮の内苑で入学記念写真撮影、洋服着用は裁松君一名のみ、この時まで洋服着用したことなし。新学期開始後始めて洋服なるものを着用す。校長阿部宗孝先生は小田原中学校長として令名高く、抜擢されて新設の六中に赴任された由。山口県出身、東大国史学科卒業。幕末長州藩の精神を汲み、精神主義を尊重され、学校教育に独自の信念をもたれた。明治天皇をいたく尊敬され、校庭には軍艦三笠の鐘楼が建設され、朝礼として毎週校長自ら鐘を撞き、明治天皇の御製を唱えられるのが恒例であつた。この影響で生徒は軍人の子弟多く、畠・白川、阿部、東条などの著名な軍人が父兄として学校行事に列席。又塩谷温博士の講演や詩吟の朗詠などあり、又毎年春秋二回の靖国神社の例祭には生徒が挙つて参列、乃木大将の自刃の命日には乃木神社に参拝するなど独

自の行事が行われた。新校舎は大正十二年より逐次建設された。校庭は新宿御苑の西隅にあつたが低地であつたため大雨の時は校庭には雨水が氾濫する状態であった。六中の後身の現新宿高校は旧位置より遙に離れ現在渋谷区に入り、旧敷地は現在道路となつて面影は全くない。御苑の一角にあつたので運動場でボールが誤つて苑内に入つた時は先生が同伴新宿一丁目の御苑正門に行き許可を受けて搜すことが屢々あつたことを記憶している。生徒指導は当時の他の中学校と較べ可成厳しかつたようで遅刻も規定回数を超えると一日「謹慎」が命ぜられた。これは何といつても繁華街新宿追分に隣接していたからであろう。又進学指導も異色であり、四年に入ると三年の成績からクラスをA・B・Cの三組とD・Eの二組に分ち、D組は文科向、E組は理科向の生徒に区分し、D組は英語を、E組は数学に重点が置かれ教材も違つていた。このやり方は現実に現われ、高校進学後の状況とほぼ一致していたのも不思議であった。（これはその後継続されたかどうか判らない。）

### 大正十四年（一九二五）

この年の最大の思い出は父の死であった。父は当時は永年勤務していた一高教授は兼任で東大助教授が専任で四月には東洋史の講座担任の教授となつたが秋の初め胃に異状を感じ、麻布にあつた父の旧友の経営する南胃腸病院に入院した。しかし十月末院長より癌と診断され、それも悪性で手術不能、あと三ヶ月程の寿命と宣告をうけた事は私にとつて最大のショックであった。父は平生極めて頑健で病氣で欠勤する事は全くない程だった。六畳の狭い書斎で衝立を隔てて座つていた私にとり父の研究生活はそのまま、自分にとつて励みであった。ただ父から勉強の導きを受けた事は殆んどなく、試験の時もよく友人から歴史の問題の山を尋ねるようすすめられても全然教えてくれず、進んで手伝つてくれたのは代数と幾何であつたことだつた。恐らく父としては気分転換の気持からであつたろう。病氣の父の強い希望で十二月帰宅したものの病氣の進行は衰えず、療養の必要上永く住んだ林町の家から本郷区曙町に転宅、漸く一室が父の為に宛てられ、隣室が私の勉強室となつたが、痛みに苦悶する父の姿と声とは手にとるようで私を悲しました。不幸にも予想は適中し、父は

翌年二月五十一才の生涯を閉じた。始めて知る肉親の死は予想外の衝撃を私に与えたようで急激な心臓の病いに罹り、四年で高校受験の機会など到底考えられず、五年生になつても学校では出欠を繰り返した。

### 昭和二年（一九二七）

このような精神と肉体のうちに中学校を卒業した、入学試験は一高を受験したもののが当然の事ながら失敗し、一年間は補習科に籍をおいて受験勉強に一応精進し、翌三年静岡高等学校に入学した、ここは気候も良し、又何となく親許を離れて「下宿」をしたい気持もあつた。しかし実際に下宿したのは二年の後半からでそれまでは寮生活を送つた。暗い印象の中学校時代とは異なり、自由は漲り、好き友を多く得たことは幸福であった。寮祭では友人より、煽てられて炊事係のおばさんより着物を借りて女装して何やら踊り、見物客より女性と「間違え？」られたことや、各部屋に飾付られた出し物に同室の大和田君と考案して丁度当時ノビレ少将の北極到達をもぢつて「伸びれ人々」と地球儀の上に人形をたてた舞台を作り賞を貰つた事など楽しい思い出であつた。しかし他方社会における左右両陣営の思想の対立したいに昂まりこれをめぐり、各地の高校でも学生運動盛んとなる。静高でも昭和四年末応援団廃止をめぐりストライキ行われ、年末試験は年越となつた。

### 昭和六年（一九三二）

三月卒業、四月には東大文学部国史学科に入学した。何故国史学科に入学を決意したのかは明確ではない。高校時代は自由を満喫したが読書も一向明確な問題意識もなく、漫然と哲学、史学、経済学の書籍を読んだにすぎない。当時は岩波文庫もしだいに数が増え廉価であつたので刊行されると購入、一通り読むと古書店に売つて又新本を求めていたようである。この中で全集としてトルストイ全集は全巻備付け繰返し読んだ。歴史の分野もどちらかというと経済史関係であり、一時は大学で経済学を学ぶ気持もあつたらしい。この間にあつて一年生の時の担任教授だった歴史の木宮泰彦先生宅には屢々訪問した記憶がある。先生は「日支交通史」という力作があり、又当時は日本古印刷文化史の執筆にかかつておら

れ、その史料蒐集の手伝をした。しかしこの事が自分の専問分野を交通史に向わせたとも思われないが、先生は自分を大學では当然日本史専攻するものと考えておられたらしい。六年二月入学志願書提出の際「自動的」に国史専攻と記載したようである。當時文学部といえど殆んど無試験で入学出来たので願書提出した後も受験勉強など何らした記憶はない。処が意外にも（二月十八日日記に拠る）大学新聞に志願者四十八名、入学定員三〇名とあり、文学部志願者全体の激増が記載されていた。法・經・文共競争率ほぼ一・八倍であった。それでも呑氣なもので三月四日付の日記には「十日ほど勉強してみよう」とある。今日では到底想像もできぬ事だ。入試は第一日午前國漢、午後日本史、東洋史、第二日外国語（自分が独語）で終了。四月十三日入学式、文学部長滝精一博士、二十一日国史十一日会での入学歓迎会あり。當時の国史学科の陣容は教授黒板勝美、辻善之助、助教授平泉澄、中村孝也の四先生であった。講義は初年度十単位程履修したが、自分には西洋史の今井登志喜先生の「英國社會史」に魅力を覚えた。同級生には今井林太郎、北山茂夫、大野達之助、島田俊彦、佐藤三郎、風間泰男、塩見薰、野口逸三郎、三好不二雄、藤原治、吉村宮男君らがあつた。授業は史学科の諸先生のほかに姉崎正治先生の「切支丹史」や中田薰先生「日本法制史」高野辰之先生の「日本演劇史」などを聽講し多大の感激をうけた。しかし大学時代と通じ最も印象深いのは當時助教授だった平泉澄先生の講義並びに演習での異常なまでの内容と雰囲気であつた。かつて「中世における社寺と社会との關係」などで学界に華々しく登場した同氏もこの時代には「国史学の骨髄」などに見られるように完全に國家主義者に変貌した。大学においての講義の中世史概説は劈頭より水戸学の源流とも称せられる栗山潛峰の著「保建大記」及び谷重遠の「保建大記打聞」の思想内容を屢々解説し、又演習「吾妻鏡」でも文中に見える「神國」の解釈に終始するなど最早科学としての歴史は完全に消失していた。同時にこの史觀に対する受講生との間に交された討論も學問の域を逸脱した感情論であった。その詳細は到底記述する余裕はない。又既にこの時点で國際関係に關心をもち、この分野の研究に多少踏み入れていた私個人に対する不可解の言辭については赦して省略する。これらの事は私自身をしていわゆる国史学（国内史としての）から逃避するに至つたものであろう。

## 昭和九年（一九三四）

三月、ともかくも国史学科を卒業した。卒業論文は「フイリ・ピンを中心とする日本とイスパニヤとの関係」であった。国際関係史の中で特にこのテーマを選んだのは当時屢々訪れた東洋文庫で当時主事であった石田幹之助氏から特に勧められたものであった。同文庫に所蔵されていた五十五巻から成るブレーヤ・ロバートソンらの共編に成る「フイリ・ピン群島誌」と題する浩瀚な史料集を中心とし、関係欧文文献と邦文文献とを用いて述べたもので、甚だ未熟なものであったが、ペーパーナイフで袋綴を切り開いて史料の収集を行うことは、半面甚だ楽しいものであった。一応の努力はしたものので、卒業を前に行われた四教授から成る口答試問では内容について全く質問なく、各先生思い思いの常識テストだけであったことは誠に残念であった。

以上思い出すまま大学卒業までの自分の足跡を述べたが、既に与えられた枚数を超えた。以後は簡単に年表的に略述することにとどめる。

卒業後一応大学院に在籍、今日とは異なり年度末指導教官に簡単に報告するのみ。黒板先生よりのすすめで当時国史研究会で刊行中の「岩波講座日本歴史」の原稿督促と校正の手伝をする。五月、板沢武雄先生よりの推薦でシーボルト文献研究室に勤務、ドイツより貸与の同文献の整理事務の傍ら洋学の研究を始む。

## 昭和十一年（一九三六）

台北帝国大学文政学部講師となり南洋史研究を行う。これは辻先生及び渡辺世祐先生よりの推挽。この春会田富美子と結婚。今後の研究の道を南洋史に求める決意をする。十一月渡台、台北市川端町に仮寓ののち、昭和町四五九番地に移り、昭和二十一年引揚の時まで居住、南洋史講座は台北大学独自のもので村上直次郎博士によつて開拓。当時の教授は岩生成一氏であつた。

## 昭和十三年（一九三八）

六月、助教授に昇任、南洋史として最初の論文「マニラにおけるパリアンの研究」を同文政学部史学科研究年報に掲載。以後同年報及び他の諸雑誌に主としてフィリピンの華僑史及びスペイン統治政策に関する諸論文を発表す。他方大陸における戦火は地形的に最も近い台湾に早く現われ日華事変勃発の二年後早くも台北は大陸よりの爆撃をうけ、在住日本人の召集も早く、十五年には第一補充兵であつた私にも令状が手交された。台湾第一連隊に入隊したが、心臓障害の故で間もなく解除となつたが緊張は一段と増した。在郷軍人としての訓練も厳しくなり、やがて大学正門には○○部隊の看板が掲げられ、軍隊に変貌した。文科系学部の授業は殆んど不可能となり、我々は戦力の一翼を担うに至つた。台北での生活中研究に従事することができた期間はせいぜい数年にも満たなかつた。本島人の「皇民化」も着々と進められ改姓名が推進されたが殊に注目されるのは彼らの伝来の信仰の対象であつた媽祖像が強制的に撤去され、代つて各家庭に大麻と天皇皇后の御真影の掲示が強制されたことはそれまで協力的であつた彼らに極めて大きな衝撃を与えたことは否定できない。又「同患共苦」の名の下にあり余る砂糖に配給制を探り入れ、後に溢れて強制的に購入させる結果をひき起した。太平洋戦争末期には大学も疎開必至となり、夫々分散、我々は中部の台中州竹山街の外れに砂糖黍と竹で組んで陋屋を建て忙しい生活の中で終戦を迎えた。

戦後国民政府による台湾進駐が行われ、大学も接收された。自分は残留徵用を命ぜられたが、辞令に記載された給与は現実には支給なく、壳喰い生活も底をついたので帰国を願出、許可され、二十一年三月末最後の引揚船L・S・Tで住み慣れた台湾を去り、妻と二人の幼い娘の手をとり無一物のまま広島県の大竹港に上陸、途原爆で廃墟と化した広島を貨車の中から瞥見し、東京の母と弟の住む家に戻つた。

昭和二十一年帰国後生活の資を得るために進駐軍の翻訳事業に暫時勤務。この年國らずも国史教科書執筆に関与、師範日本史の一部を執筆。二十二年外務省調査局に入局、日本外交文書の編集に従事す。これは友人今井林太郎君の推挙による。主としての第一次世界大戦を中心とする外交文書の編修にあたつた。翌二十三年には豊田武氏のすすめにより文部省

教科書局に入局、当時は社会科創設期にあたり特に中学歴史の指導要領の作成を担当する。ついで高校社会科改正による世界史の創設と中学歴史教科書編集に関与する。民間情報教育局（C.I.E）の監督下、折衝にあたるも相手方の日本歴史に関する知識の欠如と担当官（女性）の無理解とに容易にO・Kが出されず苦闘をつづけた。

#### 昭和二十五年（一九五〇）

三月、新設の金沢大学法文学部教授となる。同学部は旧四高、高等師範から組織されたもの、史学科は当初東洋史・小竹文夫、西洋史・西井克己、地理学・竹内常行の諸氏と私と四人の陣容で発足、建物は旧歩兵第六連隊で金沢城二丸の景勝地である。仮宅は学部長官舎でドイツ文学伊藤武雄教授と同居で生活。金沢時代は草創期のための仕事に逐われ研究にはみるべきものがなかつたが、同僚諸氏との友情を深めたことは印象深い。

#### 昭和二十八年（一九五三）

竹内理三氏（当時九大教授）の推挙をうけ、九州大学に赴任、第一講座を担当する。国史学科は同氏と二人。始めて研究生活に精進。長崎を中心とする対外交渉史を研究対象とし、傍ら法文学部地下室にあつた九州文化史研究所の充実に努める。竹内氏のほか経済史の秀村選三氏、法制史の吉田道也氏らと共に若い研究生諸君と史料探訪に研究に楽しい生活を送る。家族は東京におき一行寺、アパートでの自炊生活も又思出深い。三十八年文化史研究所が文学部附置の研究施設に認可され、初代の施設長となる。この間三十五年始めて南欧に日本関係史料調査に出張、各地方文書館を訪れ、史料探訪を行う。四十三年家庭事情により九州大学を辞し、東海大学文学部に転勤、同大学大学院創設に關与する。六中時代の師原田敏明先生の庇護をうけること大であった。尚この間松前重義総長の薦めでソ連をはじめとする東欧諸国を歴訪できたことは共産圏の社会を垣間見ることができ有益であった。

#### 昭和四十九年（一九七四）

駒沢大学文学部教授となる。当時歴史学科には長老として森谷秀亮、木代修一の二教授及び大学時代の学友大野達之助

君他若年教官多く充実した陣容に交り、教育に携ることができ感激を新にした。長老教授相ついで退職、吉田、杉山二教授來任、奇しくも二氏共六中出身者であった。以後十年余主として近世対外交渉史を中心に講義及演習を行う。五八年大学院人文科学第二研究科委員長だつた大野君病氣のため一時委員長代理、五九年委員長を一年間勤め六〇年停年退職となつたが特例の恩情をうけ留任今日に至る。

以上年譜の形式をとりつつ七十五年の軌跡を辿つた。繁簡よろしきをえず、ことに大学卒業後は極めて不充分な記述となつた。しかし顧みて改めて多くの良き師、良き先輩、良き友に恵まれ研究生活を過すことのできたことを衷心より感謝したい。終りに臨み本号を自分のための特集号としていただいた歴史学科関係の方々の御厚情に深く御礼を申上げる次第である。